慈光

第三十六巻　第六号

昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和五十九年　六月十五日　発行（毎月一回十五日発行）

（通第四一九号）

目次

真如法性身……近角常観……(1)
ただ念仏して……池山榮吉……(4)
久遠の親心……福島政雄……(8)
信一念の問い……井上善右ヱ門……(11)
木村無相さんと私……岩崎成章……(14)
法廷にて……菊池篁三郎……(18)
「三願転入」ことに「果遂の誓」……花田正夫……(21)

真如法性身

近角常観

阿彌陀仏は吾々が無明の闇を迷うているのを哀れむ大悲から出現せられたというが、そも〱このことは何を意味するかというに、例えば、ここに酒に酔い伏して夢みる人を、醒めた境界の人より可哀相で捨ておけぬ故、声をかけ揺り起し、呼び醒さまさずばおかれぬと慈悲を以って向って下さるのである。これを酔っている人間の方からは、何時の昔から酔い伏しているのである。醒めている境界の人は疾うの昔から醒めているので、何時目がさめても何もない、永劫の昔から覚めていて、始めなく終り無き広大な醒めた境界である。ただ人間の永劫の眠りがいつまでも醒めようがない故に、それを捨てて置けぬので呼び醒まさずには居られぬとなって下さるのである。そこで無始、無終のさめられた広大な境界が仏の法身の境界である。

処でここで注意せねばならぬのは、直如だの、法性だの、法身だのという時は、私がそうであったが、すぐに世界宇宙の問題を引きつけて考えやすいのである。即ち宇宙の主体が真如であると考え、世界の実在が法身であるという風になりやすいのである。これがそうした世界宇宙の理屈になると、法身と報身との連絡がつかなくなる。私はこれに困ったのであった。私も初めはそうした道理理屈を考え、それで充分解っていた積りでいたが、一度煩悶に陥入った時、今まで考えていた法性も法身も、そうした道理で考えていたことは、ことごとく絵に書いた餅で、一つも私の苦しい腹をみたしてはくれぬ。こうしていよ〱迷いに迷いを重ね、苦しみ抜いたが、即ちそれは人と争い隔て、実際問題の上でどうにもならなくなった。それがいよ〱最後に救われたのは、そういう暗黒に迷うている私をあわれみ、私が我慢深く、どこまでも隔てて行ってはてぬ心を知られて、のぞんで下されたのが広大な慈悲心で安心させてもらったのであった。

この時、過去を顧みると、真如とか法性とかいっていたことは全く意味をなさぬ。故に或時はこうした言葉が恨めしく、終にはかの『信仰問題』の中で「哲学の研究が仏教信念の上に害毒」とまで極言した時代もあった。即ち理屈で作りあげた信仰は、悩みのために砕かれてしまうのである。かくて苦悩のはてに、これが開けたのは、それをあわれんで下さる慈悲心が徹した所で安心させて貰った。

故にそこになると、慈悲ばかり、大願の思召ばかりということになるのであるが、その大悲大願は如何にして現われたかとなると、実はその広大な心は、その苦を脱し、解脱した、本覚明了の目のさめた境界の人が、その境界から、酒に酔い伏し、夢見ている人間を見ると、哀れでじっとして居られぬ故に、その大悲大願が起ったのである。若し真に目ざめた人ならば、人の苦悩しているのを平気で見るのなら真の解脱者とは云えぬ。その目のさめた境界が即ち法性、真如、仏性、解脱、涅槃である。

故に法身ということを道理理屈で考えぬようにしなくてはならぬ、これはよく聞かれる問題で、近頃は多くの人が仏書を読まれる、現に先日も或る友人の如きは親に別れて仏書を見るが、どうもここの処が分らぬとて相談に見えたのであった。その分らぬのはここを理屈に考えられる処にある。ことに現代の青年は真如法性を自ら証ることのように考える。すると慈悲に救われて安心するなど、何のことだか分らぬ。というのであるが、それが人生の実際問題に当った時は忽ちに砕けてしまう。その時初めて慈悲に出遇うのである。

私が初めてこのことに気がついたのは親に別れた時であった。平生はお慈悲ばかり喜んでいたが、いよ〱親が最後の病気の時、百方手を尽して親の病気を助けようとして、手が届かず、老病で死なれたのであったが、そのいよ〱別れた時、如何なる思いがしたかというと「いよ〱仏の世界に導かれて参らせて貰った」と、これは深く思ったのであった。さて親の病気が助けられぬ。さてこうなるとその親はどこへ行かれるか。あゝ広大な慈悲に救われて、親は仏の側へ参らせて貰い、仏の境界に行かせて貰ったと。これが私の心に出てきた故、そこで初めて未来思想を明かにさせて貰ったのであった。それまでは未来のことは云わなかったが、親に別れて、親が救われて仏の境界に行かせて貰われたとなって初めてそれを知らせて貰ったのがかの『慈光録』にある「父の示寂によって教えられし真実証の霊境」なる一文だったのである。

親鸞聖人は仏の慈悲を頂いてその結果この身体が亡くなって真実証に入ると云われているが、正しく私の父がこの肉身を終え、その境へ行かせて貰うと、身を以てそこを示して下されたと、ここの処を明にさせて貰うた事であった。換言すれば今まで喜んでいた慈悲は親も存命中一代喜ん

で見せて下され、さていよ〳〵死に際して、死して参らせて貰う仏の境界の有様を知らして下さったのである。私はここを分らせて貰って、親鸞聖人が「蓮華蔵世界に至ることを得れば、即ち真如法性の身を証す」と言われているが、成程これが真如法性の広大な仏の境界であったと、初めて気づかせて貰ったのであった。

釈尊が八十年間、種々な行化を垂れさせられて、いよいよバツダイ河畔で滅を現じ、涅槃の都に隠れ給わんとした時、「色身は滅すと雖も法身は滅せず、如来は常住にして変易することなし」と、応身の釈尊が法性常住の境を示されたと同じ様に、私は親に別れて成程今日慈悲を喜ばして貰うと云っていても、如何にしても親が助けられず、天に地に失望せねばならぬ人生であるが、今や親はいよいよこの界を脱して真実証の境界に行かせて貰われたと、そこへ考えが出て、即ち真如法性をかく生命が終る方より気をつけさせて貰うことになったのであった。

そこで最後に注意せねばならぬことは、親鸞聖人が「形ましまさぬ仏」とある。これがよく問題となるのである。即ち吾々がすがる仏でなくして、ならしめんと誓って下さった仏である。ならしめて下さる仏とは、吾々が現在生活の境界なり想像を加える形ある境界ではない。形を超絶した広大の境界である、故に自然と申すのである。今かく現にこの肉身を持ち、苦悩を重ねている私が親心を知らされ、肉体を終った時に、行く真の証りの境地である。故に真如法性とはこれを吾々の信仰の対象と考えてはならぬ。それは吾々の救われて生れる処の証りの境界である。

× × × × ×

百喩経

篋中の宝鏡

昔、さる貧乏人あり、諸方から借金取に責め立てられ、在所に居れなくなり、夜逃げした。所が途中で大切な宝物のはいっている篋を見つけたので、運が開けたと大喜びで、早速蓋を開いてみると、宝物の上に鏡が乗せてあり、それに自分の顔が映った。貧乏人はびっくり仰天し、貴下が此中に居られたことはすこしも存じませず、甚申しわけのないことを致しました。どうかお許し願いますと謝りたとのことである。

私共が日常泣いたり怒ったりすることは、大方はこの鏡中の影に迷わされたのである。

ただ念佛して

池山榮吉

〃ただ念仏して〃という言葉は、聖人のよき人の仰せにきいたきわみであり、信の告白としてのかなめであり、また人に信をすすめるおくのてでもある。

この言葉を信への手引として受入れた人は、数限りもないことであろう。私などもその一人である。この言葉に引込まれて、じゃ私もと急にまねする気になって、断然声に出したのが、あこがれの信界への踏切であった。

今日我国では、津々浦々にいたるまで、念仏の声の響きわたっていない処はない。日本人であって、この声を或は口にし、或は耳にした覚えのないものは、おさなごを除いては一人もあるまい。さすが大乗相応の日域、こうあるのに不思議はないが、他面、宇宙一切の事物は、その涯しない流転の相のうちに、鐘の音をさえ諸行無常とひびかせて、遠く近く、裏に表に、人生の最大緊急の問題、ただまことなる念仏への関心をそそらないものはない。

そも〳〵念仏は、救のためにあらわれた力の、その目指すものへの呼掛である。それをそれとも知らないで、うっかり聞きながす人の、あまりにも多きに過ぎるのは、まことに歎かわしい限りであるが、考えて見れば、億劫にもまうあいがたい弘誓の強縁とあるからは、また怪しむべきではなく、むしろただ聞いたと云うだけでも、その人とかの力とをつなぐえにしの糸は、はやくも用意されたものと、見做されるのを多とすべきではなかろうか。

進んで念仏の意味を聞いたり、考えたり、とにかく口にしたりする段になっては、もう糸の端と端とが或る交叉状態になって動きつゝあるのである。が、それがしっかり結びあげられるまでは、遅かれ速かれ若干の時を要するのが常で、その間には、深浅、強弱、方向の正否等の視点から、いろ〳〵の段階が認められ、さま〴〵の転化が行われる。

が、その中で、念仏のいわれを聞く事は聞いても、それについて多少の考慮を払っているというだけで、まだ実際念仏するという程に立ち至っていない一類と、念仏にある価値を認めて、とにかく念仏しつつある一類とでは、最後の目標へのへだたりから見て、亀と兎の馳けくらべ、必ずしもどちらが先に行きつくとも限らないが、前者の前途なお遼遠なのにくらべると、後者の地点からはもう山が見えている。念仏の出る出ないを堺として、前者は単に素見の客であるのに反して、後者はすでに謂わば力との直接交渉の圏内に立入ったものと見られる。

　力との直接交渉は念仏を通して行われる。その進捗の程度にも、見方によっては矢張いくたの段階があり、転化もあろうが、特に際立ったそれの三つがある。念仏を目的達成の一助と見るのが其の一で、目的達成への努力の焦点とするのが其の二。

　念仏も棄てたものでないとか、念仏も結構役に立つとか、念仏は他の何物にも劣らないとか、さては念仏にかぎるとか、それ〳〵の思惑に動機づけられて、おのがじし、応分の力を持出して念仏に精進すると、その効験は争えないもの、多かれ少かれ、或る法悦が感じられる。が困った事には、いつも柳の下に泥鰌がいるとは限らない。どうかするとさっぱり駄目な事がある。法悦の不連続性、これが其の一其の二に共通した徴候で、こうした徴候が存続する間は、まだ本当の念仏が手に入ったものでない。その関を越すには、今一度の転化に待たなければならない。日頃念仏を心にかけて扱ってはいるものの、どうもしっくり身につかない。どことなく拍子が抜けて、手持無沙汰の感の免れないのは、畢竟、念仏を作善の具に供しょうとするからである。我が手でまかなう資料として扱うからである。

念仏の一行にさえ及びがたい身であると知れては、地獄は一定免れない数と、焦燥の五里霧中に彷徨して、空しく指南の法輪を翹望する折柄、幸に宿善開発の時節到来、今までに覚えない響を念仏に聴取って、念仏は、救わんとする力から、力なきものへの呼びかけで、念仏する人から見れば、ただそれに応け答えをする迄のもの、つまり力そのものの発動のほか何でもないと心證する。これが転化の其の三である。

　念仏は余計なものとして作られたものでない。なくてはならないものである。と同時に、他の何物を以ても代える

ことの出来ないもの、従って単独行動は念仏本来の性分で、念仏と外のものとの共働を策するのは、この絶対性への反逆であり、冒涜である。念仏はただ惜みなく奪うものの上にのみ、あまねくその全分を光被する。其の一、其の二の念仏が、とかく坐りが悪かったのに、其の三に至って、俄かにぴったりおさまりがつくというのも、畢竟このゆえである。

　念仏を聞き初めてから、惜みなく奪い終るまで、意識にのぼるにせよ、のぼらぬにせよ、それからそれと常不断の過程をたどって止まない幾多の生成推移は、箇々の事象から見れば、或は桐一葉、或はいとし子の死、さては空中の声、縁の下の聴聞など、千差万別、それ〳〵の機縁に由来するが、その原動の源にさかのぼれば、一に力のもよおしにかかると首肯かされる理由がある。

　念仏は自動する。念仏は自省を促し、自省は念仏の意義を深める。一方念仏の意義がいよいよ深く信知されるに従って、他方ます〳〵深く自己の何たるかが認識される。信知の深まりと自省の深まり、両者は相関的に働きかけて、交互に促進を競い合う。が、その実、一つ楯の両面と謂うべきもの、結局帰命の一念に抱擁する傾向に動くのである。落着くところへ落着かせる、からくりの妙、ただ〳〵不思議と呆れるの他はない。

　念仏は招く〝一心正念直来〟と。念仏の心意気がよくこの言葉に現われている。今これを放浪の旅を続ける一人子の帰りを、ふるさとに待ち佗びる母の心に引き合わすことを許されるならば、直来を、スグキテオクレヨと訓じ、一心正念に、オネガヒダカラと仮名を振っても、そう見当ははずれていまいと思う。オネガヒダカラスグキテオクレヨ、この哀々惻々の衷情が、相手の心に滲透し、感銘した極促が、やがてそのまま内から滲み出る切々の帰心ともなり、〝念仏まふさんと思ひたつ心〟ともなるのであって、この心境の変化こそは、力とその目的物との間に、二度と解ける気遣いのない鞏い固い結を仕上げるのである。

　この新なる心境の湛える雰囲気は、〝たのもしさ〟を其の基調とする。〝たのもしさ〟は、称えるものの心に残る餘音であって、一度キャッチし得たら占めたもの、随時随所に再現して立消に帰するおそれのないのがその特徴である。固より人生の行路、愛欲名利の噪音の絶え間はないが、噪音が高まれば高まる程、冴えかえる念仏の中に、いよいよつのる〝たのしもさ〟は念仏する者に絶えず繰返される体験である。此の立場から〝神を知ったと思っていた私は、

神を知ったと思っていた事を知った。私の動乱は其処から芽生えはじめた〃とある有島武郎の述懐を聞けば、摂取の心光の保障のない信知のはかなさが思われて、うたた同情に堪えないものがある。

或るルッター研究者の説によると、ルッターも亦その信の確立には随分苦労したものである。神を信じようとして信じ得ぬ悩み、これはルッターに取って、極重の罪悪としての自覚であった。神の有無を疑ったのではない。神に近づき親しむ気になれなかったのである。それはそのはず、ルッターの心鏡に映じた神は、我々が観音菩薩に見るような、春風駘蕩の和やかさは気振りにも見えず、秋霜烈日、閻魔大王のような凄じい相好の持主で、外に瞋嫌の焔を現じているばかりか、内にも情け容赦も荒々しさを懐いているとしか思えない。こうした神を信ぜよとは、光秀に対って飽くまで信長に信頼せよと強いると同様、無理な註文、出来ない相談をもちかけるというものである。この無理な註文に応じ、隠忍自重、やゝもするともたげようとする抵抗の頭を押えて、渾身の勇を鼓しつつ、我等の父たる神の肯定をめがけて精進したのが、ルッターの求道の過程で、悪戦苦斗のはて、精も根もつきて到々我を折って参ってしまった処が、即ち、信の成立となったのであったが、それも一度こっきりでけりがついたのではない。その後も時々抵抗の嵐、否定の浪が盛り返してくるたびに、同様の奮闘が繰返されなければならなかったということである。

こんな話を聞くにつけても、念仏というもののあることの有難さである。もし念仏がなかったら、私達も恐らくこれと似たような動揺の悩を反復せねばならないであろう。それなしには生きられぬ〃たのもしさ〃を伴う念仏、〃まふさんと思い立つこころ〃をきっかけに、念仏とはぐれる気づかいのない〃たのもしさ〃。我が意気込みの強さでつかまえて離さないのではない。頼まれる力の方から絶えず供給して止まない念仏。聖人は私をこの念仏にひきあわせて下さった。筆に口にあらゆる方面から念仏の奥義を開闡して、鈍感な私にも、多少の〃たのもしさ〃を味得させて下さった。私にとって聖人は、空前にして絶後なる〃無碍の一道〃への最大の案内者である。

『仏と人』より

久遠の親心

福島政雄

まだ幼少であった頃、私の心には一種の迷信のような感情がこびりついた居た。それは途中で他家の葬式に出あったとき、左右の親指をしっかり握って慎んで通らないと、自分の親を失うようになるという迷信であった。これは或る人が何かの機会に私に言ってくれたことであったが、妙に私の感情生活にしみこんでしまって、その後は途中で他家の葬式に出あう度毎にしっかり左右の親指を握って慎んで通った。そして自分が父や母と死別するようなことになったらばどんなに淋しいことであろうと考えた。

それは遠い少年時代のことである。今の私はその時代を追憶して、あの頃の自分は幸福であったとしみじみ思うのである。郷里の熊本で両親の膝下で生い立った私は、その無限の慈愛に導かれた。中等教員の生活をして家族は多く、始終家計は不如意であった父は、その不如意な家計の中から私のために常に学校の教科書以外の有益な書籍を求めてくれた。私はこれらの書籍を今でも大切に保存して居る。夏は江津川の流れに棹して私や弟等を魚釣りにつれて行ってくれた。時には家族みんなで行ったこともある。父が蚊頭針で幾十匹かの鮠を小舟の上へ釣りあぐる夕暮、十五夜の月が東の山から川の面を照らすとき、母が即座の歌を詠んだことなどもあった。秋の夜は私や弟等は父につれられて五高のまわりの石垣に鈴虫を取りに行った。その鈴虫を祖母から教えらるるままに土鉢の中に入れて大事に養ったことなども遠い少年の日のなつかしい思い出である。

おもえばすべて過去となった。今の私は父母と死別して既に十余年を過した。どんなにしっかり左右の親指を握りしめて居ても、時が来れば親は此の世を去って行く。それは人の世の定めである。私の力を以てこれを如何ともすることは出来ない。此の世に残った此の身は今は遠い思い出に生きるようになって居る。思い出は父母の無限の慈愛を語る。まことに今の生命の全存在こそは父母の慈愛の結晶である。

併しながら静かに私の過去をふりかえれば美しい思い出はむしろ少く、我が身の親不孝の思い出は多い。幼少の頃から蒲柳の質であった私は、しば〱重い病気にかかって、親に心配をかけたことは一度や二度ではなかった。中学以後は学問上の覇気で随分無理をしても学校は缺席しないようにしたので、その気で身体を支配していたようなもので、かねて病気にかかる度数は少くなった。併し時として重い病気にかかった。かようにして私は身体の上だけでも親に心配をかけ通しであった。私が大学を卒業した頃母が私に云ったことがある。「将来若し外国に留学するようなことがあれば、結構であるが、併し健康の点が心配である」と。

青年期以後の私は精神的にも親に大心配をかけ通しであった。結婚の問題などで親に心配をかけた時、親は血の涙であった。あとで母は私に言った。「あの時は政雄を全く棄ててしまわねばならぬかと思った」と。まことに子を勘当をする決心をしてまでも子の生命を誠の道に導こうとした、その肉親の生命の動きに、今の私は久遠の親心を感ずる。久遠劫来の宿業の暗さをたどる此の私の心の闇に無限の慈愛の大生命を廻向して私と共に迷いの闇に苦しみ、その生涯を私のために苦しみ通して私の生命を光に導かずにはやまなかった肉親の生命は、今の私にとっては生きて此の身にひびく生きた慈愛の生命そのものであり、久遠劫来の私の生命の迷いを悲しみいたわる久遠の御親の親心である。

此の頃の私には御聖教の文句が生きた教として身にしみるようになった。「三千世界に芥子ばかりも釈尊の身命を捨てたまわぬところはなし」というようなことが、以前には大げさにかかれた比喩のように思われて居たけれども、今は我が身のことと感ぜられる。父母が自己を忘れて此の私のために身心をなげすててくれたことを思えば、「不可思議兆載永劫において菩薩の無量の徳行を積植したまう。欲覚、瞋覚、害覚を生ぜず、欲想、瞋想、害想を起さず、色、声、香、味、触、法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず、少欲、知足にして染恚痴なし、三昧常寂にして智慧無碍なり。虚僞諂曲の心なく、和顔愛語にして意に先んじて承問したまう」という如来の大行は、やがて私の肉親の上にも顕現せられて居ることを痛切に感ずる。否今の私はこの如来の大行を私一人を目指しての大行として、私の両親の生命の上に親しく直接に感ずるのである。まことに不可思議兆載永劫の修行は、此の煩悩無尽なる私の生命の上に直接に廻向せらるる久遠の如来の大行であり、しかも私はそれを我が肉親の父母の生命の上に最も痛切に感ずるのである。

心光のあと

福島政雄

日は暮れて道とほけれどみ仏の久遠のひかりわれを照らすも

しづかにもわれは辿らむ道とほく日は暮れたれど御仏の道

斯の道やたれか辿りし遠しろくひかりみなぎる永劫の道

聖の道つらぬきませし親鸞の自然法爾のみこころおもふ

さびしさを語る人をなみひとりゐてただ御仏の御名をとなふる

距を踰えずと孔子のたまふ七十路のみすがた清く御顔しづけき

まことなき身をかえりみず世に立ちてまことありげなる此の身淋しき

み仏のまことのいのちしみじみと身にしみわたりただ念仏する

うらぶれの年は暮れ行けどまことの道ひたすらに進む心は止まず

三界に家無き身なり御仏をたのみまつりて住みうつり行く

述懐

人の世のさかしき道に老の身をむち打ちて歩む一日ひとひよ

み仏のとはのひかりのなかりせばさかしき道にたふれ伏さまし

かへりみる五十余年のたましひの辿りのあとに心光照らすも

信一念の問い

井上善右ヱ門

ある老婦人から次のような書翰が寄せられました。その要は「ながい間、聞法させていただいています。しかし回り遠いお話はもう沢山ですから、もっと直接に平明にさっと信一念そのものを話してもらえないものでしょうか」と。その訴えには切実な思いがこもっていることを感じました。しかしその問いは容易ではありません。直接にズバリと信の総てが語り尽くせるものなら、「易行而無人」という経説も「難中至難」という言葉も必要ではなかったでしょう。そこには言葉では尽くしきれない溝があります。それを渡ることこそ聞法ではありませんか。

先ず第一に思われる事は、馬を川辺にまでつれてゆくことは出来るが、馬に水を飲ますことはできない。水を飲むのは馬自身だという喩えです。人間の言葉が役立つのは川辺までです。ではその水を飲む馬にどうしてなるのか。それにはまず水を欲していることが必要です。それはまた渇を覚えていることでもあります。

人間は自身をごまかすことなく、突き当るべきことに突き当るのがよいと思います。それが最も大切な問題に気づく道筋ではありますまいか。言葉を換えると人間は追い詰められてみることが必要だと思うのです。簡単な事柄ですが、人間は誰しも仕合せを願うています。また何よりも大切なのは自分であることも承知しています。自分がどうなってもよいと思う人は一人もありますまい。ところが一歩すゝんで幸福とは何かと問うてみるとそれがわからない。健康で物質に恵まれて家族が順調でと、夢を追うことはできても、現実は思うようにならぬのが人生です。自分が大切だとわかっていても、その自分とは何かと反問すると解らない。常識が崩れ、夢が破れて闇にさ迷いはしませんか。

また自分の心をかえりみると、矛盾に満ち〳〵ていることが感じられます。嘘つきが好きだという人はない、それでいて自分は嘘をつきます。純粋な心を願うても、わが心の中は混沌として不純を脱しえないのです。情なく思うて

もどうにもなりません。安心を求めても心の底には不安がつきまとうています。そして人生の最後には死が訪れる。その死を如何に受取るか、それには死の解決が必要でしょう。要するに人間は身体的にも精神的にも環境的にも追い求めれば求めるほど突き当るのです。この人生が有限相対な無常の世界であり、そこに住む私が幻の自我意識に縛られているかぎり、苦悩を脱却することはできません。我執にまつわられて、あっちへ行ってもこっちへ行っても突き当るのです。

漱石が『草枕』の冒頭に「……とかくに人の世は住みにくい、住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れ、畫が出来る」と言っているのは人の知る名句ですが、どこへ行っても住みにくいと末徹って気づいたとき、その世界を超える扉が始めて開かれるということでしょう。その扉が開かれるかどうかはその人自身の事柄です。外からの説明で開ける扉ではありません。そこに超えねばならぬ溝があります。

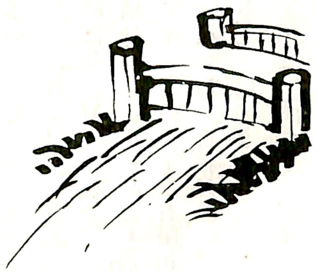
身も心も相対の世界に縛られている人の命に真の明るさを期することは出来ません。『大経』に「無量寿仏の声を聞くことを得て歓喜せざるなし、心に開明を得たり」とありますが、それは限りある虚仮の命に、限りない真実の無量寿が入りこんで下さる消息です。この相対の世界に住む私が絶対との関係に目を開かしめられるのです。無量寿仏の声をきくとは南無阿弥陀仏となって喚びかけておられる仏心に今まさしくおあいすることです。これを親鸞聖人は値遇という言葉で語られました。値遇とは、この私の命を真実心が摂取して開明をもたらしたまう本願に、思いがけなくもはたと気づかせていただくということです。信一念の問題はこの外にはありません。

その信一念を自覚とか体験とかいう言葉で語られる方々があります。自覚というのも体験というのも共に間違いとは思いません。しかしそれは我が心の働きを意味するのではないのです。心が月を捉えるのでなく、月が心に映って来るのです。それを私は聞法が実感になると申してよいのではないかと思います。聞法は理解から始まるでしょうが、それが理解で止まるかぎり未だ信ではありません。その理解が転じて実感となるとき信の扉は開かれるといえましょう。

問題の本質は違いますが、理解が実感になるということは、われわれの人生経験にもあることです。例えば親心のご恩を知らねばならぬということは、幼いときから教えられ聞かされて理解はしているのです。ところが長じて人生のある実際の出来事にあい、そのとき始めて、あ、こんな

にまで親は私の事を思っていてくれたのかと身に沁みて親の有難さを感じることがあります。その時は最早や理解ではなく実感なのです。実感というのはそのことが話しではなく事実となった時に起ることです。事実に直面したとき最早や疑うにも疑いようはありません。今如来の本願の真実が事実となって実感されることを信という字で言い表わされていると申してよいと思います。まさしく真心徹到であります。

親の真実に値うて親を呼び親に應えるそれが念仏であります。『歎異抄』に「たゞほれ〴〵と弥陀の御恩の深重なること常におもい出しまいらすべし、しかれば念仏も申され候。これ自然なり、わが計わざるを自然とは申すなり、これ即ち他力にてまします」とあります。この外に何をか言わんや思うのです。



貞信尼の歌

はからわず南無阿彌陀仏と称うほか
　思うも云うも迷いなりけり
へだてなき深き御法の恵みにて
　隔て心もうすらぎにけり
理屈にもはずれた彌陀の慈悲なれば
　理屈はなれてすがるばかりぞ
我思う心のうちぞ有と無との
　中を流るる南無阿彌陀仏
無始よりの罪も障りもそのままに
　救う誓のたのもしきかな
繰り返えしなお〳〵励み称うべし
　出入りの息の通うかぎりは
深からん罪もおそれぬ彌陀なれば
　深きお慈悲の底やなからん
夢の世を夢と思うも夢なれど
　南無阿彌陀仏はまことなりけり
すなおなる柳の枝を見るにつけ
　ゆがみながらに南無阿彌陀仏

木村無相さんと私

岩崎成章

木村無相さんとの出会いは、去る昭和五十四年以来、五ケ年間、毎月一回の法談に福井県武生市の養護老人ホーム和上苑に出かけ、御縁を重ねてきた者で、当時本山の問題、特に澎湃とひろがっていた宗意安心の傾向が、私の学んできたものとは違った方向に走りつつあり、それが縁となり、名古屋の花田正夫師に御縁をいただき、同師の〝慈光誌〟を介して、無相さんの声咳に接したのである。

無相さんは十年前、武生に移住してから痼疾の心臓病のため、六回も入院を重ねて、そのあげく去る二年前に生前葬式も行ない、本人自筆の宛名入りの死亡通告も作り、

信もなし、ウタガヒもなし、
生も死も、
ただナムアミダ　ナムアミダブツ

とむすんでありました。

去る九月の書信に

秋彼岸、
しみじみおもう身のおろか

と朱書し、次のように説明が加えてあった。

昭和八年八月から、昭和三十三年七月までの満二十五年、二十九才から五十四才まで、真言中心に、真言、真宗と三往復したあげくに、昭和三十三年七月にいよいよ最後的に、高野山の真言の道場から下山した。そして昭和三十三年七月から、昭和五十八年九月の今日まで満二十五年間、真宗を専一に聴聞させていただいて、ただ念仏の身にさせていただきました。お念仏は第一回の真言時代の昭和十年六月(三十一才)から称えるようになり、今日まで四十八年、お念仏にツキマトワレテ、そのオカゲでとう〳〵念仏一つ、と云うことにされてしまいました。その真言を最後に下山した。昭和三十三年（五十四才）の秋、福岡県久留米市の病院に入院している時に出来た句です。丁度三十五年になります。そのころ「おろか」と思ったより

も、十倍も百倍も「おろか」ものでした。
が、香樹院師おおせに

「よく聞け、よく聞け、よく聞くと、
ワケのわからぬなりに助けて下さる、
ということにワケがわかるからナ」

と、今はもう、ワケのワカラヌなりに仰せのままに、ただナムアミダブツ、ナムアミダブツ「クチ」の動くだけが、わたしの仏法、「クチ」の動くだけが、わたしの真宗、「クチ」の動くだけが、わたしの信心であります。

「クチの動くだけ」「クチの動くだけ」
「観経」下々品に「応称無量寿仏」「加減の文」に「称我名号下至十声」「歎異抄」に「ただ念仏して」「御和讃」に「称我名字と願じつつ」、ただもうナムアミダブツ、ナムアミダブツ。ひと声ひと声、ナンマンダブツ、ナンマンダブツ。

ひと声、ひと声
如来のお声。
ひと声、ひと声
浄土の真宗。
秋彼岸、ただ念仏のみぞ

彼岸への道
ナム　ナム、
ナム　ナム、　と。

去る十二月二十六日、御病臥中の述懐に曰く
〃おとどしから、はっきりと頂けた。
それから去年、今年と、
いよ〳〵これ一つよりない。
お念仏一つや、仰せ一つや
苦しいと念仏も、声で申されぬ
ああ仰せ一つやなぁ
となえよという仰せ一つやなぁ
こちらでとなえてからではない
となえよと言う仰せ！
こんなものに、となえよという仰せがかかっておる、
もうそれだけや、
と、仰せ一つが改めてありがたく頂ける、
何もこちらはいらんのや〃　と。

ＮＨＫの宗教の時間に話された〃煩悩と私〃の対談は、〃あれは正味のはなし〃と仰言る。どんなえらい先生の話や本を読んでも、ここまでが我が身の実感として、いつわりのない所を聞かしていただく。とかく、アリガタイ話にだまされて、我が身の本性を見抜くことが出来ぬ。その本性

をこのお話でわからせていただいたと申し上げた。

私自身、過ぐる五年間を省みると、宗祖のおことば以外は拝読せず、専ら先徳僧俗の語録により、実感により、無相さんの御述懐に耳を傾け、質疑応答を重ねて来た。毎月の御縁とは云え、その間、本山の問題や家庭の事等、何かと無駄なひととときも費やしたが、終始一貫、無相さんの答えはお念仏一つであった。その都度の無相さんの御話は有難かったけれども、ありがたいだけ、然しここのところはありがたいとも何ともないこの身がわかって来た。自性に即してありがたい、これで満足ですといかんけれども、不満足ながらやすらかである。それより外にない。

無相さんの折々のお手紙を拝見する度に、あたかもダイヤモンドを発見するように感ぜられ、よくまあ、セッセとこれ程までにいつも同じことをよく云って下さったことよと、御親切の程が身にしみます。

無相さん曰く、よく、五年間も続いたなぁ、如来様の誓願力がないと続かぬ、お育てやなぁ、あなたもよかったけれど、わたしもよかった。誰か一人気がついて欲しいと思っていた。それが此処のところぐん〳〵わかって来だしてわしは楽しみじゃったと仰言る。

私曰く、どんなことがあっても心が開放された気持でありがたい。師曰くおちついてこれより下がどん底の最後やと思うとお念仏申してもらくや。味いは色々わかってくるけれども、根本はそれより外がない。さとりは臨終の一念で、それでよい、それがさとりと云われては困る。忘れ通しのこのものをさとりといつでも通じるはずがない。チットモわからぬ、歎異抄に、来生の開覚は他力浄土の宗旨、とある。

わが機というものがまるっきり零点であるとわからぬから、今のお東の若い人達が、この世でさとると云いたくて仕方がない。それは機がわからぬから、格好のよいことを云って流行らせている。

私曰く、歎異抄第二章に、親鸞におきてはただ念仏してとは、いずれの行も及び難き身という三定死に立った親鸞におきてはであったということ。私はこの親鸞を自分と同じ様にながめていたが、そうではなかった。叡山の親鸞が三定死に立たされて、吉水の法然上人をたずねられて、お念仏一つと頂かれて本願に帰し給うた。それが親鸞におきてはであった。観経下々品の〃汝若し念ずること能わずんば、無量寿仏の名を称えよ〃ということが、そこへ来ていると私は領解した。三定死はそこである、念ずること能わずんば、はよい加減のものに非ず、そこでなかったら、ただ念仏せよの声がきこえない、そこにかかっている。知識としてもそうですが、それが深められてありがたい。

自分ではどうにもならぬというところ、心に属した念ず

るとは一切駄目だと云う処が、いづれの行も及びがたさとも云うし、それを極重悪人とも云うわけで、念ずること能わずとは大変なところで、何度も〳〵反唱しております。本当に万劫の一時とでも云おうか、全く来て御縁に会えてよかったと思いますと申し上げたところ、そうや〳〵と喜んで下される。後髪を引かれる思いでおもいなしか手を固く握りしめてお別れしたのである。今思えば忽然と去り給うた感深し。

終りに「無相メモ」より抄出させていただく。

〝念仏は無義をもって〟

歎異抄第十条に、念仏は無義をもって義とす、とある。

念仏は「よき人の仰せ」、「如来の勅命」のままに、ただナムアミダブツ、ナムアミダブツ、と称えるだけのことである。ああだ、こうだのはからいはいらぬ。仰せのままに、勅命のままに、ただ発音念仏するだけ。

念仏のイワレもナニも、少しも知らなくていいのである。ただ「仰せ」のまま、「勅命」のまま称えるところに意義がある。念仏成仏これ真宗。

〝称えつつ〟

〝称えつつ〟が大切。〝称えつつ〟念仏のマコトに遇う、これを〝信心マコトに得る〟という。

〝称えず〟に得たと思うは、単なる観念なり。

〝称えつつ〟名号のミダに遇う。これを信心マコトに得るという。

以　上

×　×　×　×

二月号の活字訂正のお知らせ

本年三月発行の慈光、第三十六巻三号の十五頁、下段三行目「外相の改革」は「来生の開覚」でありました。私が難聴のため、「煩悩と私」の木村無相さんのラヂオ放送を聞き聞違いました。幸に、福井の加茂淳光さんに教えられました、おわびいたします。

――花田　生。

法廷にて

（判事）菊池篁三郎

佐藤　均　（仮名二〇歳）　窃盗被告事件
後藤　博　（仮名二四歳）　（二二・九・五）

均は足なえ、胸を病みたり。
博は強度の乱視、失明に近し。

俯きて
ただ　おど〳〵と口ごもり
上目（うわめ）づかいに盗み見にけり（博）

かたわなる若き二人の
あてどなく　職を求めて
遂に盗みし

俯きて
ただ何もかも忘れしと　述ぶる
被告の　力無げなる（均）

秋晴れの　日に
ともしたる法廷の　電灯
淡く淋しかりけり

法廷に
ともる電灯見つめつつ
若き被告の訴えを聞く

昭和二十二年九月十日午后、宮城刑務所を巡視せり

作業場の窓に
手製の風鈴の
ふと眼に触れて足を止めたり
ガラスびんを切りて風鈴にしつらえたり

晝食に
いわし二匹の添えてあるを

しみじみ眺めうれしかりけり。

未決囚

未決囚
いらだつ心そのままに
坐りつ寝つ　立ちつ　歩みつ
小窓より中を覗けば
正座せる　少女
静かに面を伏せたり

既決囚

しかすがに（さすがに）
食はたらひて清潔に
朗らかなるが嬉しかりけり。

兼子専吉（仮名）　外二名強盗事件（二二・九・一）
かたわなる
貧しき友を救わんと
賭場に押入り強盗したり

友は飢え
賭場は榮うる矛盾をば
憤りつつ強盗したり

賭場の金
強盗しては悉く
貧しき友に与えて去れり

渡辺喜一（仮名三四歳）横領、窃盗事件
（二二・一〇・三）
「囚われて又会う日のあるべきや？」
病床の妻
　血を吐きて　泣く

三十に満たで
数犯累ねたる
被告の妻は幼児と泣く

幼児かかえて
　妻は胸病めり！
ひとやに勝る苦悩を思え！

菅井正一郎（仮名二一歳）窃盗事件（二二・一〇・三）
盗みせし手を

山口良忠判事営養失調にて職に仆れたりという。
（二二・一一・八）
『若き友
伯夷叔斉さながらに
死にたり』という新聞を読む

この友の死を
わが事に思いつつ
眼つむりて新聞をおく

新聞に名士の批評を載せたり
「何とか方法がなかったか」という類なり
高潔の心を酌まで
とうこうと論う輩
憤ろしきかも！

斬りたしと訴うる
若き被告の悲痛の心！

手を斬りて
罪消ゆべくば手をも斬れ！
汚れし心　いずくにか濯がむ

筒井タネ　（仮名二四歳）　臓物故売事件
二十回、二萬円に及ぶ　（二二・一一・五）
嫁ぐ日の　夢にひかれて
盗品の衣類を買いし
　少女ごころよ！

恐ろしき罪とも知らで
嫁ぐ日の夢にひかれて
犯せしという

（執行猶豫の言渡ありたり）
情けある裁き聴きつつ
いくたびもひとり肯き
涙しにけり

「三願転入」ことに「果遂の誓」

花田正夫

私共は幼い時から、善くなれ、賢くなれ、でないと皆から呆れられ、捨てられるぞと繰り返えし巻きかえし教えこまれて、それが自然に身についている。

そこに仏界、浄土の教えを聞くと、自分が善根功徳を積まないと美しい浄土に生れることは出来ないと思い、根機に相応して、手当り次第萬行諸善を励みはじめる。

然し真剣にそれを実行して行くと、そこに内外に種々な障りが出来て、その道はまことに厳しいことが知れる。はじめ私は孔子の「聖人は独り居て慎む、小人は閑居して不善をなす」と聞き、独り居る時の心の日記を誌してみると、とても人様に見せられたものでないと恥じ、小人の身を悲しんだ。次にソクラテスの「我は何事も知らざんことを知れり」を聞き、自分はその反対でよく分りもしないことをも知ったか振りをしている身が照らし出され、聖書に「悔い改めよ」と教えられるが、悔いる事は沢山あっても、それを改めることの出来ない愚鈍さに驚いた。更に極く身近な人に対して、その人の成功を共に喜べず、不幸を見ると口では同情しながら内心では、快くなる、この冷酷さを払うことの出来ないことも知らされてきて、自分の力ではあらゆる善を行う力のないことに絶望しはじめた。

かくて、菩提心を発して諸々の善を修しておれば、彌陀仏が臨終に現われて、浄土に迎え入れて下さるとの、仏の願はあっても、自分の根機には虚しいことが知らされてきた。

次に、名号は諸の善法を攝し、諸の徳本を具足した、功徳の宝海と聞き、この仏力を加えて頂いて浄土へ生れようと願いはじめた。諺にも、麻の中の蓬は直ぐい、とあるように、自分ではよくなれぬ身も仏界浄土に生れると悪への縁が断たれようからと、一途に善本徳本の名号を稱えて往生成仏の望みを達しようとはかりはじめた。

かくて、念仏に最高最勝の価値を認めて、行住坐臥をえらばず、時処諸縁をきらわれず、御廻向せられた稱え易く持ち易い名号に専心する。然し、相対差別の分別智しかない身とて、名号の絶対価値は知る由もなく、随って自分が喜んで念仏申せるときは、間違いなく浄土に生れようと思い、反対に、念仏もよろこべず、ものうくなると、これでは矢張り駄目かと嘆き、生死の海に浮き沈み漂い続ける。

唯こうした間に、念仏申していると、自分の姿が照らし出される、それは暗い部屋に電灯がつくと、部屋の様子が見えてくるのに等しい。元来我々は、鏡が鏡自身を写し得ないように、自分で自分を知ることが出来ない。真面目に反省しても、身びいきな自分の影しか見えない。それは一時的な部分的な自分の影であるが……。

善導大師は「決定して深く、自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し常に流転して、出離の縁あること無し」と信ず、と御自身を慚愧していられる。そこに、過・現・未の三世を貫ぬいた罪悪生死の凡夫の全体を教えられる。親鸞聖人の一念多念証文に「凡夫といふは無明、煩悩われらが身にみち〳〵て、欲もおほく、瞋り腹立ち、そねみねたむ心多く間なくして臨終の一念にいたるまで、とどまらずきえずと水火二河の譬にあらはれたり」とある。

これを聞き、これを繰り返し考えても、我執我慢の塊の身には、自分は悪いけれど、すこしは善いところもある、また現在は駄目でも何時かは善くなれようと、理想に彩られた未来の自分に幻惑されて、臨終の一念にいたるまで駄目とは思えず、そのために、性懲りもなく迷い続ける。

私自身は、ここに、果遂の誓を聞き、フト親は子になくてはならぬことのために昼夜に苦労するが、久遠の御親にまします阿彌陀仏は、私になくてはならぬことを見抜かれて御苦労して下さることに想到し、私自身が何時まで経っても、我よしと思い、何時までも浮かぶ瀬のないことを仏はかてねお見抜き下さった上に、これをことに憐れまれての御誓であったと気付き、「他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり」と仰ぎまいらせはじめた。

臼杵祖山老師は、「自分が彌陀仏の弘願の光を身にうけて、はじめて、修諸徳本や、植諸徳本の願に未練を持ち続けていることが知れ始める」と云われている。夢中に夢と知れず、狂人は病識がないと同様、十八願の弘願の光を身にうけて、成程自分は十九願や二十願の世界に何時までも惑い続けていることが知れはじめるのである。

福島政雄先生は「三願転入ということは、これで万事解決ということでなく、この世の生命の続く限り、生命の終りまで、常に三願転入し続けているというのが、私の実際の姿である。もう十九、二十の願には用事が無くなったと云うのではないと臼杵先生からうかがって、そこをよく感

じました」と、四十八願の御講義の際述べていられる。「それですから信仰は何月何日からきりがついて、立派な生活を、純信仰者としてやって行けるというものではない」と述懐されました。

最後に、この十八願の終りに「唯五逆と誹謗正法の者を除く」とあることに着目させられる。阿彌陀仏は一切衆生を救い遂げて下さるのに、どうしてこの但し書きがあるのであろうかと、昔から種々問題にされたものである。さて他人様はさておいて私自身に、この仰せがあって始めて自分は五逆の悪人であり、謗法の罪人であったと知らされるのである。私自身、五逆の者とは薄々知らされたが、誹謗はしていないと思いこんでいたら、或時、外人牧師が「仏教は偶像崇拝で駄目」と非難するのに合い、そういうキリスト教徒も十字架を拝んでいるではないかと反駁し、更に真宗にはこれこれの特長があると云う心がおこった。その時歎異抄の第十二章に「わが宗こそ勝れたれ、ひとの宗は劣りなり、というほどに、法敵もいできたり謗法もおこるなり、これしかしながら自らわが法を破謗するにあらずや」とある一句がひらめき、真宗に限る、一番勝れていると思いこんでいるまんま、法を破謗していたと慚愧し、冷汗三斗の思いであった。

「お前のような子は、親でもない子でもない」と父からきびしく云われて、はじめて自分の甘え心が破られて、本当に親に背きずめの身と知れる。先日父の五十九回忌を迎え弟二人と霊前に合掌しながら、沢山の子をのこして亡くなった父はどんなに苦しかったであろうか、あの時は自分が困ることばかりで胸が一杯で、父の身にはすこしもなれなかったと、今更の如く愧じ入ったことである。

臨終の時まで一向妄念の身には、いつまでもわれ悪しと思いきれず、またしても何時かは善くなれようとの我執我慢に引きずられて行くのである。ここに「果遂の誓、良に由あるかな」と親鸞聖人が特に讃仰されているにつけ、成程、かかる不徹底に終るより外にない私のために、我が名を称えよ、その者を浄土に迎え必ず成仏せしめずにはおかないとの御誓がましましたのであると、いよいよ渇仰申している。

むすび

相対的な智恵しかない我々は、絶対価値の名号をどんなに努力してみてもそのままに受取ることは出来ない。唯こうして果てしない苦海を流転する身を、かねてしろしめす仏は、この絶対無力な者に、善本徳本の名号をお与え下さって〝ただ念仏して〟とお喚びかけ下さるのである。

ところが念仏の意味がよく解ったら称えようと、前に置いて思案する。池山先生は或夏の日、団扇を出されて「これを前に置いて眺めていては涼しい風は来ない、手に執って扇ぐといい風が来る」と云われて「念仏も唯考えていたのでは駄目である」と申され、「物の取引きは通貨を媒介とする。仏と人との交渉は念仏を通貨とする」と加えられた。友人が「仏も浄土も解りません」と訴えた時「念仏なさい。説明はいくら聞いても理解にとどまる。念仏申していると自然にその味いが知れるから」と答えられた。

又『仏と人』の中に、「念仏は自動する。自動は自省を促し、自省の深まりに応じて仏恩の深遠なことが知らされる」と誌していられる。

聖人の浄土和讃に

至心・廻向・欲生と　十方衆生を方便し
名号の真門ひらきてぞ　不果遂者と願じける
定散自力の称名は　果遂のちかひに帰してこそ
をしへざれども自然に　真如の門に転入する

とある。釈迦如来が、十方諸仏の護念証誠の中に彌陀の名号を濁悪邪見の衆生におあたえ下さるのである。

このお誓いがなかったなら、絶対の仏智を知る道もなく、また、自分の全体、三世を貫いて浮かぶ瀬もない身には、永遠に救済の道は途絶える。

「いずれの行も及び難く地獄は一定すみかぞかし」と仰言る聖人は、「内愚外賢」と八十三歳の御著述の愚禿鈔に誌され、更に八十六歳の、愚禿悲歎述懐には

浄土真宗に帰すれども　真実の心はありがたし
外儀のすがたはひとごとに　賢善精進現ぜしむ
貪瞋邪偽おほきゆゑ　奸詐ももはし身にみてり
悪性さらにやめ難し　こころは蛇蝎の如くなり
修善も雑毒なるゆゑに　虚仮と行とぞなづけたり
無慚無愧のこの身にて　まことの心はなけれども
彌陀廻向の御名なれば　功徳は十方にみちたまふ

等々と、内に慚じ外に愧じていられる。「如来の願船いまさずば苦海をいかでかわたるべき」とも「如来の廻向をたのまでは無慚無愧にてはてぞせん」と渇仰していられる。

これは二十九歳で法然聖人の教導によって、他力摂生の旨趣を受得し、凡夫直入の真心を決定された聖人の御晩年の述懐であった。襟を正し、坐を改めていただくばかりである。

あとがき

本年も六月を迎えました。四月には無相さんの百ケ日、六十人ばかり各地から和上苑に参詣され、追慕されました。またその記念に『相念』、古来現仏、仏々相念の大経のお言葉を題字とされて、武生市瓜生町和上苑、苑長白藤昭武さんが追悼号を出版して下さいました。（実費千円）御希望の方は和上苑に御申込み下さい。

近角先生は御尊父の御逝去を機に、真実証の霊境、真如法性身をお述べ下さったものを頂きました。親心子知らずでありますが、その親は時と所を問わず子に必要なことで辛苦して下さいます。それを通して親の心に子は触れるのであります。方便法身の仏ましまさなければ我々には無縁で終ります。

池山先生のただ念仏しては、御晩年の御遺言であります。くりかえし身読させて頂きましょう。御長男の寿夫様が、「南無阿弥陀仏、これだけよ。これだけしかないんだよ。これだけでいいんだよ」と先生が口癖にしていられたと仰言ったことも思い浮びます。

福島先生の久遠の親心は、地上の親をとおして「子の母をおもふ如くにて、衆生仏を憶すれば現前到来遠からず、如来を拝見疑はず」の和讃通りであります。

信一念の問いの井上先生の一文は、とかく概念の蜘蛛の糸に縛られ勝の私共を解放して下さる御親切なものであります。

岩崎成章師の「木村さんと私」はマザ〱と無相さんにお会いさして貰える、感銘深いものであります。念仏者無相さんの面目躍如としており、皆様と共に拝読させて貰うことに致しました。

菊池篁三郎判事さんは、珍らしい念仏者で、法廷に立つ人々を念仏裡に拝まれた歌であります。一首々々心うたれるものばかりあります。

果遂の誓の一文は、改めて三願転入の妙趣を味い、誌しました。幼い時脳膜炎にかかり、何時までも独り立ち出来ぬ子を残して死の間際まで「死んでも死にきれぬ」と言い続けた人の声もひびいてまいりました。

御案内

第三日曜午后一時半から一道会の例会をお隣りの鬼頭様宅で催します。

おねがい

御手元で、第三十五巻二号、か、第三十六巻三号の慈光誌で不用になったのがありましたら、慈光社へ御送り頂きますようにお願い申上げます。

定価　半年　八〇〇円（送共）
　　　一年　一六〇〇円（送共）

名古屋市南区駈上一丁目十四-二十九
編集・発行人　**花田正夫**
電話　八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　**坂部光雄**

名古屋市南区駈上一丁目十四-二十九
発行所　**慈光社**
振替口座　名古屋　六-一〇四七〇番
郵便番号　四五七

慈光　第三十六巻第六号　昭和五十九年　六月十五発行　（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可